

# 〈日本文化〉は どこにあるか

國學院大學日本文化研究所 編  
井上順孝 責任編集

春秋社

## 〈日本文化〉はどこにあるか

---

2016年8月25日 初版第1刷発行

編者 國學院大學日本文化研究所（井上順孝責任編集）  
著者 井上順孝＋篠田謙一＋スチュアート・E・ガスリー＋  
河野哲也＋ウィリアム・W・ケリー  
発行者 澤畑吉和  
発行者 株式会社 春秋社  
〒101-0021 東京都千代田区外神田2-18-6  
電話 03-3255-9611（営業）・9614（編集）  
振替 00180-6-24861  
<http://www.shunjusha.co.jp/>  
装丁 伊藤滋章  
印刷 株式会社 太平印刷社  
製本 黒柳製本 株式会社

---

Printed in Japan, Shunjusha  
ISBN 978-4-393-33351-8 C0014

定価はカバー等に表示

© 2016 Nobutaka Inoue, Kenichi Shinoda, Stewart E. Guthrie, Tetsuya Kono  
and William W. Kelly

はじめに 複雑な渦の中にある〈日本文化〉

井上順孝

3

〈日本文化〉像への二方向からのチャレンジ 3

受け継がれるもの・消えるもの 7

新しい視点の提示 10

むすび 16

第二章 DNAで読む日本人の形成史

篠田謙一

19

化石の証拠から描く人類の起源と拡散 21

DNAの生物学 24

DNA分析が解くホモ・サピエンスの誕生の謎 27

ミトコンドリアDNAの系統解析と人類拡散のシナリオ 31

我々以外の人類との接触 34

ホモ・サピエンスの世界展開 38

これまでの日本人起源論 42

ミトコンドリアDNAデータによる日本人起源論の検証 46

縄文人のミトコンドリアDNA全配列を用いた分析 50

縄文・弥生の人口から見える日本人の形成 52

北海道の地域集団の成立 54

琉球列島集団の成立 59

日本人の起源を考える複眼的な視点 62

## 第二章 神仏はなぜ人のかたちをしているのか

—— スチュアート・E・ガスリー

65

### —— 擬人観の認知科学

(藤井修平「訳」)

擬人観の普遍性 67

擬人観とはどんなものか 79

副産物としての擬人観 87

動物のアニミズム 95

擬人観の神経学 98

まとめ 100

## 第三章 アフォーダンスと生態学的倫理の構築

—— 河野哲也

105

「法的なもの」から「動的なもの」へ 107

生態学的倫理の提案 111

アフオーダンスと環境問題としての倫理 114

成長と生命多様性 118

境界なき倫理——コスモポリタニズム 125

#### 第四章 ローカルな生活世界から見える現代日本

——人類学者の視点から

——ウィリアム・W・ケリー  
(加藤久子「訳」) 141

現代日本をゆるがす構造変動 143

社会科学とりわけ人類学から眺めた戦後日本 147

二〇世紀後半の庄内地方——伝統的な田舎が近代的な地方都市に 150

大きな力の到来をローカルに再解釈し方向転換する人たち 163

確実性から不確実性へと向かう二一世紀はじめの日本 170

むすび 175

#### 第五章 現代日本宗教のリバースエンジニアリング

——今を観察することから始める

井上順孝

はじめに 181

現代の日本宗教の多様性 182

古代から現代まで引き継がれている要素 187

宗教進化論の誤解 190

内的環境と宗教進化 193

宗教史へのリバースエンジニアリング 200

現代宗教のリバースエンジニアリング 204

遺伝的に組み込まれた認知の仕方 209

内的環境のリバースエンジニアリング 215

境界線に関わる認知 220

まとめ 224

あとがき 229

第四章 ローカルな生活世界から見える現代日本

——人類学者の視点から

ウィリアム・W・ケリー

(加藤久子 [訳])

二一世紀の日本社会は大きな構造変化を迎えている。第二次大戦に敗戦したこと、日本社会は職場、家庭、学校といった人生経験の主要な場においても、それまでとは異なる理想を持ち、新しい型を追求しようとしてきた。このことが実際にはどのような問題をもたらし、どのような矛盾を含むものであったかは、地域共同体を細かく観察することでよく見えてくる。

著者は京都の大学で学び、山形県の村落の調査を長年にわたって行った。そして今それを振り返る。山形県庄内地方の農村にトラクターとテレビがやってくる何が変わったか。黒川村に伝わる黒川能が伝統文化として外部から評価されるようになっていく過程の表舞台と裏舞台で起こっていたことはそれぞれ何であったか。表面的な分析において見過ごされがちなものから現象の奥に潜む葛藤の正体に、人類学者の目が迫っていく。表舞台と裏舞台には別のストーリーが進行している。そのズレと相互の関係を深く見ていくと新しい問題が浮かび上がってくる。

終戦後日本が育んできた自信は、二一世紀になって揺らいでいるように見える。日本社会の停滞と凋落が予測されてすらいる。だがローカルな共同体を観察してきた著者は、日本全体にも、また庄内のような地域にも新しい試みがなされていることに注意を向ける。二〇世紀の日本社会についての諸研究は、西洋をモデルにした近代化の理解に列の道を拓いた。近代化の担い手が多様になったことの意味を考えさせることとなった。ローカルな生活の場の注視は、こうした理解をしていく上にも欠かせないことがよく分かる。



## 現代日本をゆるがす構造変動

日本を研究する外国人の社会人類学者として思い起こすのは、日本をフィールドとした我々の人類学的調査の伝統が、一九五〇年代に創設された國學院大學日本文化研究所とほぼ同時期に始まったということである。唯一の例外としては、一九三〇年代のジョン・エンブリーの重要な研究業績がある。我々のような外国人の人類学者による日本研究は、日本からの助成金や日本の研究機関に負うところが大きい。このような国際対話が続いているのは非常に恵まれたことである。本章では、日本を専門とする外国人人類学者という立場から、現代社会に対する我々の見方について、いくつかの見解を示したいと思う。

二〇一六年の日本は、大きな課題に直面している。二〇一〇年代という時代は、二〇一一年三月一日の東日本大震災とそれに伴い発生した凄まじい津波、原子力発電所事故とともに始まり、明治神宮外苑の新国立競技場にオリンピック聖火が灯される二〇二〇年夏季オリンピック（東京オリンピック）をもって幕を閉じるが、今まさに、その中間地点を通過したところである。二〇一一年と二〇二〇年は極めて象徴的な年となる。そこでの出来事は、停滞と発展、プレカリティ（寄る辺なき不安定さ）と富、既知であるが疑義を投げかけられている過去と未

知で不安に満ちた未来の間で、宙ぶらりんになっている日本という国を大きく変えるかもしれない。

不安定であるがゆえに、日本社会の今後の方向性を予言することに、昨今大いに関心が注がれている。学術研究、政府の報告書、メディアの論評、また世論において頻繁に話題にのぼるが、そこでは悲観的で不安な論調が優勢になっていると言つてよいだろう。

日本を揺るがしている構造変動については一般に認知されており、熱い議論が繰り広げられている。主要な論点は次の五つである。

(1) 日本は、時に「人口崩壊」と言われるような急速な人口縮小と高齢化の只中にある。国立社会保障・人口問題研究所の試算によれば、日本は二〇六〇年までに、現在一億二八〇〇万人である人口の三分の一を失い、この間、六五歳以上人口の割合は、現在の二五パーセントから四〇パーセントに急上昇するとみられる。

(2) 二〇二〇年来、婚姻率は劇的に低下し、初婚年齢は上昇し、出生率は低下し続けてきた。厚生労働省によれば、二〇一三年における平均初婚年齢は男性三〇・九歳、女性二九・三歳である。世帯構造についても、単独世帯が統計上最大のカテゴリーとなっており、全体の二五パーセントを占める。老いも若きも一様に、一人暮らしが新しい標準類型となっている。

(3) 日本は、ほとんどの地方都市で人口や経済発展力が急落する一方で、東京に人口と財が過度に集中するという両極端の状況に直面している。もちろん、東京は四世紀にわたり国家

の中核であったが、現在の集中ぶりは、その他のあらゆる都市や地域の人口減退を助長している。政府の調査は、日本に現存する八六九自治体の約半数は、人口流出と出生率低下のために間もなく「消滅」するものと見積もってきた。

(4) 経済的な強さの基盤である、安定した持続的な雇用は深刻な減退をみせており、若いも若きも一様に、そして男性よりも女性にとつてより一般的に、不安定な「非正規」の有期雇用が新しい標準類型となっている。労働時間は長く、給与水準は停滞し、手当はなくなっている。

(5) 数十年の間、日本に卓越と経済的繁栄をもたらす原動力となっていた教育部門も問題を抱えている。ブルーカラーとホワイトカラー両方の若者にとつて、学業の達成と卒業証明書を職業の経歴へと緊密に結びつけていく有効なプログラムは断たれてしまった。大学では、数値至上主義的な監査文化によって、教員のモラルと生産性が低下した。

多くのアナリストがより深刻に受け止めているのは、これらが問題の単なる羅列ではないという点である。むしろ、すべてが相互に関連しながら、相乗効果で、動かしようのない不都合な悪化のサイクルを創り出しているのである。これらは、日本には勝ち目が無いことを予言しているように見える(一例として Allison 2013)。

一部には、このような傾向が、二一世紀の日本を人口が現在より低水準で安定し、経済的にほどほどに繁栄し、一部では地域の再生も見られるような持続可能型の社会へと変えてゆく可

能性があると信じる楽観的な見方もある（一例として Pilling 2014）。しかし、日本の未来についての方の見方は、いまだかつてなかったほどに悲観的である。

実際、現在のこのような傾向は、相互に関連する社会変動についてのぞつとするような仮説に説得力を持たせている。しかし、しばしば見落とされる近代社会科学の一つの特徴に目を留める必要がある。過去一五〇年にわたり、ヨーロッパや北米、日本において、高度に訓練された研究者（経済学者、社会学者、歴史学者、政治学者など）による理論的に洗練された社会科学が発展してきた。これらの基礎研究や、近代の社会生活を対象にした実証研究の成果は貴重である。しかし、我々の社会の未来に関し、彼らが何らかの展望を予想したものは、ほとんどすべてが不十分であるか誤っており、日本研究についてもそうであった。六〇年前、すなわち一九五〇年代半ばを思い返そう。学者であれ、それ以外の人であれ、一九六〇年代の日本の記録的な経済成長を誰が予想しただろうか？ 実際には、それ以降一〇年ごとに、我々は自らの予見の結末、すなわちその予見が誤っていたことに大いに驚かされてきた。一九六〇年に、一九七〇年の日本を誰が予見しただろうか？ 一九七〇年に、同年について評価を下しつつ、一九八〇年について正確に予言した人がいただろうか？ 一九八〇年にバブル経済とその崩壊、あるいは一九九〇年以降の地球規模での地政学的な大転回を誰が予言しただろうか？ そして一九九〇年代初頭に、「失われた二〇年」の長ささと深さを誰が知っていただろうか？

とすれば、十分なる懐疑を抱いて、日本の変化についての予言を受け止めざるべきである。

我々は起こりそうなことを予想することはできるが、何が起こるかは予言できない。このように言うのは、日本社会についての解釈を行ってきた社会科学や歴史学の重要な研究成果の化けの皮を剥がすためではない。我々の役割は未来の予想より、過去を振り返っての説明にあるということを心に留めるためである。社会科学者としての我々に最大限できることは、現状を分析し、現在の状況を作り出した道筋を説明することであろう。

### 社会科学とりわけ人類学から眺めた戦後日本

このようなやり方で説明をしていくという役割において、日本国内外のあらゆる分野の社会学者が優れた見識を示してきた。第二次世界大戦後の数十年間、日本社会において一般的だった社会形態について考えてみたい。思い起こせば二〇世紀後半の研究者は、日本人の人生経験のリズムが、職場、家庭、学校という三つの主要機関によって、なぜ、どのように理想化され、また習慣化されたのかという点について論証してきた。終戦直後の政策により、この三つの機関は根底から変化した。経済復興初期における企業、労働組合、労働力の再編、そして新民法の成立、また教育制度の早期の改革がそれにあたる。家庭における助け合い、学校における成功、そして職場における安定について、理想的とみなされるあり方がこれらの機関の力によって狭められた。つまり、国家の政策と世論がともに、大企業による雇用、メリトクラシー

(能力主義)に基づく學歷社会、働く夫とその世話をする妻の間で分業が行われる核家族を理想としたということである。真面目な学生、勤勉な企業労働者、既婚の世帯主が理想として掲げられることで、学業成績の基準、好ましく感じられるもののイメージ、実現可能なことの範囲が規定されたということである。

他方で、大企業による雇用、大学入試競争における勝利、生涯にわたる核家族での生活などというものは、二〇世紀後半を通じて、統計的には少数派であったことも知られている。職場・学校・家庭の実態は、はるかに多様であった。その間、日本社会の型(モデル)として特徴的であったのは、これらの理想が多くの日本人にとって生活の実情と相反するものであったにもかかわらず、それがいかに説得力を持ち、必然でありつづけたかということである。職場・家庭・学校といった機関は戦後の野心を方向付け、実に多くの成果を要求し、それを生み出してきた。二〇世紀後半の日本の成功と緊張感は、この「管理された差異化」の上で成立していたのである。

多くの調査が日本社会に関するこのような描写を裏付けてきた。では、社会科学の学問分野の中で、人類学者が特に貢献してきたのはどの分野だろうか？ 数十年來、人類学者は、村落や学校、工場、魚市場、鉄道駅、生活協同組合、郊外や繁華街、漁船、製陶所、神社仏閣、酒場、公衆浴場などに姿を現してきた。日本を対象とした人類学の博士論文は、英語で執筆されたものだけでも、六〇年間で約三五〇にのぼり、ほぼ同じ数の書籍と四千〜五千点の論文が公

刊された。人類学という学問分野全体を見ても、日本研究はモダニティに関する世界最大規模の民族誌のコレクションを作り出し出している (Robertson 2005 および Bestor and Bestor 2011 有益)。

この人類学分野の研究成果をまとめると、どのようなことが言えるだろうか？ 社会のマクロなテーマに焦点を当てる他分野の社会科学の研究者と比べて、我々人類学者は、多くの民俗学者と同様に「ミクロの権威」であることを認められ、それを奨励されている。日常生活の細々としたことの中から興味をそそられる点について記述しているが、より広い視野に立って、理論的な蓄積に貢献することは決してないと思われる。日本社会のマクロな問題についての理解を助ける我々の役割は、二義的なものに見えるらしい。

人類学者は固有のやり方で学問に貢献してきたが、このように甚だしい誤解を受けている。社会生活について我々が解き明かそうとしている課題は、社会的な影響力がどのように人々に可能性や制約をもたらすのかという点である。しかし同時に、そのような影響力の内側や周囲にあつて、現実を生きる人々が自らの生活に意味を付与し、これらの影響力に対処するために、どのような巧知を働かせているかについても分析する必要がある。人類学者が二〇世紀後半の日本社会について示してきたのは、日常生活が組織化されたり、それらの組織が再編されたりする中で、それらの組織は実体を持つようになり、職場・学校・家庭などの機関を支えてきたということであるが、他方では、それが行政の目標や大きな利権が意図するところに逆行する

こともよくあるのである。人類学は、長期間にわたるフィールドワーク、ローカルな実社会の組織を緊密に観察する能力、ローカルな実践やローカルな論理立てに対する注目などによって、社会構造のみならず社会構造の形成過程を明らかにすることができるのだが、後者は特に重要である。

社会科学者には予言することはできず、また、すべきではないが、我々人類学者が調査と学識を通じて行うことができ、また、行わなければならぬことは、現代日本人の生活をもたらししたのは何かという問いに、妥当かつ説得的な説明を示すことである。これこそが、日本を専門とする人類学が果たすべき重要な役割である。

## 二〇世紀後半の庄内地方——伝統的な田舎が近代的な地方都市に

私が人類学者としてのキャリアを開始し、生涯のテーマとして日本研究に取り組み始めたのは一九七〇年代のことである。京都のいくつかの大学で学び、一八ヶ月をホストファミリーと過ごした後、私は山形県庄内地方の農村に移住した。庄内は日本海に面した小規模な平野で、全長七〇キロ、幅一五キロほどである。二つの市と多数の小さな町村から成り、七〇〇の農村集落が存在している。私は二年間、これらの農村の一つでフィールド調査を行ったが、その間、複数の家族と生活を共にした。私を受け入れ、人生を分かち合ってくれた人々の優しさを、私



はいかなる時にも大切に思い続けるだろう。京都の友人たちが、私は都会の洗練された町を離れ、時代に取り残された辺境の片田舎に向かうのだと言って心配したことをよく覚えている。しかし私が発見したのは、その地域は私が去った大都会と同様に、いろいろな意味で完全に近代的な場所であるということだった。かつての生活様式の特定の部分に対するノスタルジーが、近代的な生活様式を熱望する気持ちと完全に併存しており、都市における生活と全く同等であるか、ある部分ではより快適であった。近代化するのかそれとも貧困化するのかというグラント・ナラティブ（マクロ・レベルでの説明）は、庄内の現実の生活における喜びや痛みにはほとんど結びつかなかった。以下、近代や大都市としての要素を包摂する庄内地方についての人類学的な分析として、三つの短い例を示したい。

事例一——トラクター、父から息子に譲渡されたもの

庄内は二〇世紀に日本を代表する米どころの一つとして頭角を現した。一九七〇年代以降、専業農家の数が減り、兼業農家が一般化した。稲作は地域アイデンティティの中心であり、公共政策や地元産業界においても以前と変わらぬ重点が置かれてきた。政府と農協が稲作農業の機械化を強力に推進したのが一九七〇年代で、その結果は、当時庄内の農家で暮らし、調査を行っていた私に衝撃を与えた。トラクター、移植機、コンバイン、穀物乾燥機など——ありとあらゆる機械が導入され、かつては大変な労力を要する労働だった米づくりのプロセスに大

変革がおきた。農林水産省が機械化政策を推し進め、主要な農業機械メーカーが機械を売り込み、農協がローンを宣伝し、操作や修理の専門技術を提供したのである。

また、農家の人々も、農作業の機械化を熱狂的に受け入れているのは明らかだった。馬に引かせた鋤で田を耕し、手で苗を植え替え、鎌で収穫するのは骨の折れる大変な労働であった。それに対し、今や複雑な機械を用い、リースやローンの交渉をして、専門技術者と働いている、それはとてもモダンなことであった。機械化は、彼らに近代日本で主流となる生活をもたらしたのである。

しかし、ローカルな行為やローカルな意図は、二つの意義深い方法によって国家の政策や行政の計画を覆した。国の農業政策は機械化によって日本の稲作農家の規模を拡大し、小規模農家に離農を促すことを目的とするものであった。すなわち、少数の専業農家が所有する、少数の大規模農地を農業の中心に据えようとしたのである。しかし私が見たのは、それとは正反対のものであった。ほとんどの農家は農業を辞めることなく、省力化を可能にしたこれらの機械（とそれに伴う多額の補助金）を、農業を継続するために使っていたのである。町で就業している彼らの仕事は休みとなる土日の間に、狭い農地での作業を迅速に終わらせることができるようになったからである。庄内における兼業農家の数は縮小していない。むしろ、その数は目に見えて増加しており、農林水産省の政策の意図を覆したということになる。

田んぼからの眺めもまた別のことを明らかにした。しばらく経って明らかになったのは、そ

これらの機械を操作しているのは一家の主ではないということであった。一家の長は四〇代から五〇代で、長年自分の父親の下で働いた後にその地位を譲り受けたのだが、トラクターや移植機の運転席に座っているのは、むしろ二〇代の彼らの跡取り息子であった。なぜか？ 若者らは農業高校に通い、機械の操作の仕方を習った世代だからである。機械の運転の仕方、修理の仕方、そして機械を使って稲を育てる方法など。家長らは、機械を自宅で管理し、それを使って耕すことに自信が持てず、譲り受けたばかりの権能を早々に譲り渡すことをもいとわなかった。彼らの多くが私に、自分には栄光の時代は一度もなく、恩恵にあずかることも決してなかったのが悲しいと述べたが、しかし彼らは、機械化された新時代の農業従事者である息子を誇っていた。機械化は彼らにどちらかといえばほろ苦い結末を生み出した。家族経営の農地は保護されたが、それは問題のある経済的な枠組みと、予期せぬ世代交代の上に成立したものであった。

### 事例二——テレビが茶の間によって来た

これらの変化は、別の変化によって補強された。私が長期にわたり地域内の農家で暮らしたり、彼らを訪問したりした末に気付いたその変化は、茶の間におけるテレビと関係している。

トラクターに代表される生産技術が科学的な農業を田畑にもたらしたとすれば、テレビに代表される消費技術は日本の茶の間に大衆文化をもたらした。日本のテレビ放送は一九五〇年代

に開始され、またたく間に国民文化を地方の各家庭に伝達するための主要なメディアとなった。消費者の間で、テレビは洗濯機と並び「電化ブーム」を牽引する消費財であった。早くも一九六〇年にはテレビを所有する世帯は四〇パーセントとなり、私が庄内に住んでいた一九七〇年代には、同地方の九五パーセントの世帯がテレビを所有していた。

これらの家族と一緒に暮らしたり、彼らを訪ねたりしている中で、私にとって最も印象的だったのは、見かけは些細なテレビの配置が、どのように「茶の間」の空間を再編したかということだった。日本の田舎に関するほとんど全ての研究が、茶の間での座る場所の固定的な配置について、つまり囲炉裏あるいは近年ではコタツを囲んで家族と客人が座る場所の慣例的な配置について言及している。この配置は、床の間と、その傍らにある仏壇が基準となっていた。

一九七〇年代の庄内地方の一般家庭では、日々の暮らしの場となる茶の間のほかに応接間を設ける余裕はなく、仏壇はしばしば茶の間に置かれたと記録される。床の間を背にし、床の間によって縁どられている席は、威信と権威を象徴する席であり、家長が座る上座である。具体的に座る場所の配置は社会階層や地域によって多様であるが、家長の右側が客人の席、その次が住み込みの使用者、そして跡取りではない子供たちの席となるケースが多い。そして左には家長の両親、長男あるいはそれとは別に指名された跡取り、妻などとなる。

一九七〇年代に改築した家でも床の間はそのまま残されていたが、その場所は今やテレビを置くのに好都合な場所として用いられるケースが多いことに気が付いた。それはつまり、家長

を除くすべての人から見やすい場所にテレビの画面があるということである。私の経験では、家長は脇に移動しているケースがよくあった。コタツからの注目の焦点は、家族全員が向き合う中、家長に向いていたところから、床の間のテレビの方を向くように変化したのである（同様の変化を観察した藤竹、一九八五年を見よ）。

座る場所をめぐる秩序は永遠に失われ、テレビから聞こえるキャスターの声は、茶の間の權威であった「じいちゃん」の声に挑戦状をつきつけた。ゆえに、テレビの茶の間への侵入は、家庭内での權威の構造を大幅に変化させる直接の原因となり、それは、息子が運転する納屋のトラクターによってさらに強化された。

### 事例三——黒川能と文化遺産のポリテクス

人類学のローカルな物の見方や注意深い聞き取りから導き出される三つ目の事例として、庄内の村、黒川の全国的に有名な祭礼を挙げる。私は黒川地区にも住み、調査を行った。江戸時代にさかのほれば、黒川村は行政上一三の集落から成る村であった。現在でも黒川の二三集落は、丘の上に位置し、家々と平野を見下ろしている春日神社の氏子であることによって規定される。黒川一三集落にあたる三〇〇世帯のうち、約二五〇世帯が春日神社の氏子になっている。春日神社の年間行事の中心となるのが王祇祭おうぎさいで、現在は二月一〜二日に開催されている。これは、春日神社の氏神を迎え入れ、歓待し、祈願を行う祭礼である。ご神体は山から麓へと迎

えられ、氏子と心を通わせ、彼らの人生や日々の生活に幸運をもたらす。特殊な漢字を用いて「王祇」と書かれる「扇」は、紙垂を飾った三本の長い柱を白い木綿の布でつないだものごとである。王祇が三角形の扇の形に開かれると、それは神を招く依代としての役目を果たす。王祇祭では、行列や宴会、祈禱、競争事、能の形式をとった神事が二日間続く。黒川能は、侵食してくる全国規模の「社会」というものに向き合いながら、ローカルな伝統を熱心に守っている素晴らしい例であるように見えるだろうが、さにあらず。

春日神社の氏子二五〇世帯は、さらに二つの宮座に分けられている。能座とも呼ばれる二つの宮座はほぼ同じ規模で、上座は七地区一三〇世帯、下座は六地区一二〇世帯で構成される。神職を含むいくつかの役職は世襲である。例えば、それぞれの座に禰宜がおり、「能太夫」と呼ばれる演者が主役を務める。多くの役は世襲ではないが、主役と楽器の演奏については大抵特定の家系によって世襲されている。子供や若者はその他大勢の役を務め、六〇代、七〇代の古老の男性は地謡を担当するのが一般的である。それぞれの座から延べ七〇人の男性が二月の祭礼の舞台に出演する。

能は、神社だけでなく、それぞれの座に所属する氏子の自宅においても演じられる。神事の主催者にあたる毎年の「当屋」は歳の順に、その役割をまだ果たしたことはない最年長の男性が選ばれるが、多くの人はこれを人生最後の榮譽とみなしている。この役目には大変な物品と資金の準備が求められる。また、家を「近代的な」様式に改築、改装したいという欲望に耐え

て、広い部屋、高い天井、取り外しのできる間仕切りといった古い様式の家屋を維持しなければならぬ。だが、その義務を伴う機会を断る者はまずくない。

初日の早朝、両座の当屋と幾人かの守役が神社で顔を合わせ、降臨した神を迎え、祈願を行う。両座それぞれが束ねた王祇の柱を運び、神を安置するそれぞれの当屋まで行列する。一日かけて、座のすべての氏子と招待された親類、客人のために、点呼（座狩）や振る舞いが行われる。夕暮れを前に、家の中央の部屋に能舞台が用意され、七時から夜を徹して演じられる能のため、全員が参集する。演目は祈願によって始まるが、これは開いた王祇の前で、選ばれた五歳の男の子が謡い、足を踏み鳴らす「大地踏」の舞である。これに引き続き式三番、そして能五番とその幕間に狂言四番が演じられる。

二日目未明、当屋、能役者、その他の氏子たちは列をなして神社に戻る。いや、より正確に言えば神社のふもとにある屋敷（榊屋敷）までである。そこで、人々はもう一つの座と出会い、挨拶を交わす。並んで神社の階段を登るのだが、これは二つの座の若者の間でどちらが早く王祇を神社の舞台奥まで運ぶかという競争になる。両座が能を演じ、続いて合同で大地踏の祈願が行われ、両座の若者による競争事がさらにいくつも行われ、神職による祈祷が続けられる。夕刻に舞われるテンポの速い三番叟と、神社の内陣まで王祇を運ぶ最後の競争をもって、全ての祭祀が終了する。そこは、もはや神霊によって生命を与えられたものではなくなった王祇が、翌年まで収納される場所なのである。

多くの人にとってこの二日間は、美的にも情緒的にも満足できる、狂乱と荘厳、遊びと儀礼のリズムなのである。祭りのテンポは、単調でゆっくりとした導入部、長い展開部、急速な終結部という三部から成る能のテンポ「序破急」を摸しているように見える。

広義において、王祇祭は一月三日から二月三日までの一ヶ月間続けられる。祭礼は、奉納、能番組の発表、祭りの舞台と参加者に対する最初の祓いによって始まるのである。稽古や準備、潔斎の儀式は一ヶ月間続けられる。二月三日、面や衣装、舞台は片づけられ、その他の道具は次の年の当屋に移される。そして、翌年の祭礼のサイクルに移行する印として、盃事が催される。なお、人類学者の中牧弘允が一九七〇年代に黒川能の研究を行っており、その貴重な研究成果は『Matsuri: Festival and Rite in Japanese Life』（國學院大學日本文化研究所編、一九八八年）に所収されている。

王祇祭は能を披露する重要な儀礼上の機会であるが、その他にも座は年に六度の定められた機会に能を演じる。また、通常、二、三度は招待を受けて、東京かその他の都市で講演を行う。実際、王祇祭と黒川能は、日本の地方のものとしては最も知名度が高く、また長く研究されてきた「民俗芸能」の一つとして、テレビのドキュメンタリー番組や研究論文、観光客向けのガイドブックの題材となってきた。また、一九三〇年代における本田安次の研究で「民俗芸能」が取り上げられた際には、重要な事例として扱われ、民俗芸能は「民俗学」を構成する三つの柱の一つとなった。さらに、東京での「全国民俗芸能大会」や専門の能楽堂でも歓迎された。



一九七六年に国の「重要無形民俗文化財」に指定されたほか、いくつもの重要な文化賞を受賞してきた。すなわち、黒川能は、真正性を示すあらゆる標章を身にまとっているのである。

外部から黒川にそのような惜しみない注目を注ぐ人々はさまざまで、本職の能楽師、大学の研究者、メディア関係者、アマチュア写真家、祭りファン、一般の観光客、好事家の親類などである。黒川能保存会は櫛引町の教育委員会内に事務所を構え、地元の人々が「外交問題」と呼んだりするような対外的な折衝のクツションやパイプの役割を果たしてきた。近年では、夜に当屋を訪れる外部からの見学者数を調整するために抽選を行ってきた。また、農林水産省のプロジェクト資金により、春日神社の脇に「伝習館」が建設された。伝習館には、稽古用の舞台、展示スペース、講義室などが設置されたほか、年間を通じて常時訪問者を呼び込み、娯楽や知識を提供することを目的として、駐車場とレストラン施設を増設するという野心的な計画もあった。これは、国民文化の枠内での黒川能の立ち位置や人々のローカルな生活がより広い社会によって脅かされることについて、地元の人々の間で議論を過熱させる「事件」や「問題」の射程を示唆し始めるものであった。地域住民を二分したこれらの議論は、長期にわたる現地調査の中でようやく姿を現したのである。

当初私が非常に興味をひかれていたのは、表舞台と舞台裏という演劇的なメタファー、つまり建前と本音のアナロジとして、黒川能の外観とそれについての表象とを対比的に分析することであった。例えば、一九八五年、黒川の能座は東京の国立能楽堂に招待され、三日間の公

演を行った。それにあわせ、仮面、衣装やその他の道具の特別展が開催され、『黒川能の世界』という美しいカラーの図録が制作されたが、それには次のようなことが述べられていた。

黒川能は山形県鶴岡市にほど近い黒川村で、神事能として成立したものである。江戸時代以前から現在に至るまで、変わらず演じ続けられている。これは、プロの能楽師ではない、農村の人々によって能が伝えられた希少な例である。能五流が芸術的な洗練を遂げたのに対し、黒川能は、祭礼と日々の暮らしが密接に結び付いた中で生き続けている能なのである。ゆえに黒川能は、市井の人々の精神の糧を受け継いできたものであり、それは芸術精神の中心に位置するものである。また、黒川能は、能の五流の演目の中では廃れてしまった多くの演式や演目を存続させている点でも貴重である。近年、黒川能は研究者の注目を集めるようになり、東京で演じられることも多くなってきた。このようにして、黒川能の存在は広く知られるようになったのである。

これは、生きた伝統と言われるものを真空保存してノスタルジックにしたようなものを大仰に述べたものである。それによれば、第一に黒川能は生き延びてきた伝統である。そして、共同性、つまり地域によって生み出されるものを表している。また、それは市井の農民による民俗芸能、つまり農民芸能である。そしてそれは神道の儀礼であり、神社の祭礼である神事能で

ある。

私にはこれも外部の消費者向けに発表された明らかな建前に見えた。その背後には、内部の人々の間で分かち合われる、それと反対の真実の感情、つまり建前ではなく本音が突き止められるように思えたのだ。つまり、右の記述を建前として読めば、黒川の人々の間で了解される王祇祭に関する本音は以下のようなものになる。

①不変ではない。底流では不断の変化がある。主役を演じる「太夫」は、それぞれの能座において途切れることのない単一の系譜であるという決まりがあるが、上座の太夫の家系は二〇世紀になって四度にわたり変更された。

②協同ではない。かなりの競争があり、儀礼の中にそれは確認できる。その他の場所においては確認できないが、誰かの息子を大地踏の役に選ぶ際の慎重な手法のようなものは、あらゆるところで見て取れる。

③孤立や無関心とはかけ離れたもので、長い間、より大きな社会との交流があった。一八世紀から一九世紀にかけて、黒川の人々は定期的に藩主の前で演じるよう命じられ、また城下町で繰り返し公演を行った。二〇世紀には、交流はさらに拡大した。外部の講師から演目を学び、膨大な量の衣装と仮面のコレクションは支援者から貰ったり、プロの職人から購入したりしたものである。

④そして、それは神聖なものなのだろうか？ お神酒が効いてきた宴席での会話は、神との

交わりより仲間の座員との連帯に焦点が置かれる。「今年の下座の謡は下手で聞いたものではなかった」「囃子方のTは、高砂の最後のところを演じきるには経験不足だ」「Cの弟子は、Uの弟子より大地踏が上手かった」。宴席での話題は芸の話で、誰かの家族や友人、相手方の品定めが絶え間なく行われるのである。

この整然とした二分法を用いることにより、当初、私は伝統芸能と近代農業のアイロニーを強調するつもりだった。つまり、黒川の人々の打算的かつ戦略的な祭りの利用法、その「伝統的な」芸術としての名声を、農業の機械化や町のインフラの近代化のための補助金獲得に利用するやり口について説明することが最も重要だと考えたのである。祭礼についてのこの功利主義的な（あるいはシニカルと言えるかもしれない）態度というのは多少の真実は含んでいるが、私は彼らの態度はもう少し微妙なものであると考える。

一つに、戦後の祭礼と農業の関係はより複雑で、不明瞭なものであり、決して直線的なものではないのである。つまり、次のようなことである。

① 農業が復興した終戦直後の一九四〇年代後半から一九五〇年には、住民が時間や資金をほかのものに差し向けたため、祭礼はほぼ壊滅状態となった。

② 農業が豊富な助成金と機械化によって盛り上がりを見せた一九六〇年代から一九七〇年初頭に、祭礼は再び無関心と冬季の出稼ぎによって脅かされるようになった。

③ 一九八〇年代、米余りと転作の失敗により、農業危機が深刻度を増す中で、祭礼は再び盛

り上がりを見せるようになった。

実際のところ、地域経済の大部分は工場労働者とオフィスワーカーによって支えられており、專業農家によるものは一握りである。祭礼は日々の農作業を反映するものであると言われているが、今日では単におぎなりに関わっているだけの農作業に比べれば、祭の運営ははるかに心躍るものである。文化のポリティクスといえども、彼らは単なる功利主義者ではない。また、ローカルな能役者たちと、全国にいる新しい観客たちとの間は、きっぱりと二分できるものでもない。これは、近代的な部外者たちの大きな社会に対し、ローカルな伝統を守るといふ単純な二分法を避けるべきもう一つの理由でもある。

### 大きな力の到来をローカルに再解釈し方向転換する人たち

伝統主義が方向転換や抵抗を行う可能性を、地方の政治経済を包摂し、従属させようとする中央からの封じ込めの圧力と、真正な形式を保存し、ローカルな過去の記憶を守るために地域が差異化を推し進める力として、定式化することもできる。しかしながら、黒川についてはこれさえも誤解である。「封じ込め」は祭礼にも内在するプロセスであり、真正性は黒川の人々と部外者との共犯関係を必要としていることが明らかになった。

祭礼の準備や公演に不可欠なのは、古老の男性たちの間での能座、氏子組織、地元の政治団

体における地位をめぐる競争、能役者の家同士の格式をめぐる競争、男性の能役者と女性の手伝いの間で、父親たちと息子たちの間で、師匠と弟子の間に、農家という社会的アイデンティティを強調する人々と地方都市における企業労働を重視する人々の間で、地元住民たちが繰り広げるさまざまな競争である。象徴にまつわるリソース、社会基盤、儀礼の情緒的な力は、大抵の場合、エリートの権力構造を成立させ、人々にそれを強制するものである。これらの数多くの競合関係をつなぎ合わせ、重みを持たせているという意味で、黒川の毎年の祭礼もその例外ではない。

しかし、形式や意味、価値にかかわるヘゲモニーは、エリートによる支配を認めるのと同様に、エリートに規律を求めるものである。この意味で、王祇祭の運営は、ローカルな空間に競争の機会をもたらして来たし、その競争は、おおむね「慣行」と言える範囲内で行われてきた。例えば、現在、両方の座の主役にあたる「太夫」は、座の期待に大きく反している点があるとして、座員からの批判に直面している。一人の太夫は、その穏やかな物腰が真のアマチュア精神を反映しているとして、多くの人に好感をもたれているが、その反面、彼の四〇歳になる息子と別の跡取り候補が太夫を引き受けることを拒み、近年、黒川を離れているのを止められないことについて、容赦のない非難を浴びている。もう一つの座の太夫は、芸の力量と、能のいくつかの流派の宗家と個人的な交流があることで尊敬を集めているが、リーダーとしての独裁的な「ワンマン」ぶりが激しく攻撃されている。三人の主役級の演者と師匠による合同運営と

いう古くからのやり方を彼が壊してしまつたと、多くの人が非難している。二人とも、幾度か辞任や引退の危機にさらされてきた。これらの出来事は、芸術的な才能に関する序列的な慣行と、祭りのスポンサーシップの平等主義の原則との間で続いている矛盾を浮き彫りにした。

別の意味でも、封じ込めをめぐる闘争について示すことができるかもしれない。祭りの心（精神）は、「協同」と「競技」の二つが一つになったものである。両者とも濫用されがちで、ゆえに制限されるべきものである。例えば、協同は共謀とみなされやすいものだが、多くの座員の話から、春日神社の氏子組織の行う諸手続きは、どうも閉鎖的であるようである。さらに、能舞台の上で行われる競争の背後には、能座内の数人の主役級の間での激しいライバル争いと敵意がある。

儀礼の本質や儀式の評価基準の変化については、真正性の観点からありふれた問いを立てることが出来る。儀礼については、当然ながら数多くの定式化が行われているが、日本の儀礼に関する発言で最も頻繁に引用されるのは、脱呪術化された近代世界における儀礼の運命についての民俗学者の柳田国男の嘆きである。一九三六年にヴァルター・ベンヤミンが、オリジナル（本物）の真正な「アウラ」について述べた有名な論考と時を同じくして、柳田は、信仰者たちの排外的な内輪の集まりが、外部の観客によって徐々に包囲され、別のものに置き換わっていくと述べている。聖なるもの（ハレ）の崩壊を扱った柳田の定式によれば、地域の祭礼は観光者向けの見世物に置き換わっていった。

柳田のノスタルジーは、黒川の多くの年配の住民が共有している。彼らは外部の人々から、現在の公演と遠い昔の祭礼の記憶について「どのように比較するか」と、性急な評価を求められているのである。一つには、一九七〇年代の柳田ブームによって、柳田の多くの概念が有名になり、「かつてそうであったこと」に関するさまざまな質問に対し、無難で簡単な回答を提示しているからである。にもかかわらず、それが主張される時、祭りの「精神」の消滅をほめかされることを快く思う住民はまずいない。

人類学者のアルジュン・アパデュライはかつてエスニック料理について、つまり「日本料理とは何か？」というような問題について話した際、当初は他の料理との境界を主張するために、料理の独自性に関心が持たれるが、知名度が高まり普及していく中で、固有の形態や料理の真性が関心を引くようになることを示唆した。排他的なものから真正なものへ向かうこの軌跡は、料理などいくつかの伝統的实践にとつては有効であろうが、黒川の例には必ずしも当てはまるわけではない。それは、黒川において文化的に生み出されて来たものは、常により大きな社会に抗いつつも、同時にその大きな社会の立場から自らを見てきたからである。

例えば、聖なる時間や場所、その時間や空間に参加する度合いという概念の中で排他性は未だ守られている。しかし、祭礼の時間と空間にまつわるこの三次元の模式図は、例えば「参加が同心円状になっている」というようなユークリッド幾何学的方法で読みとるべきではない。黒川能を適切に模式化するために重要なのは、そこに部内者・部外者それぞれの複雑な対立や



共謀関係があるということである。例えば、部外者は事実上は内部にいる。当屋の舞台の真正面、最も榮譽ある席の最も広い区画を与えられているのは、抽選で選ばれた観客なのである。他方で、多くの座員は寒い夜に窓越しにそれを眺めることになる。また、私が最も鮮やかに記憶しているのは、その夜の終わり、朝五時頃の出来事である。舞台で用いられたすべての衣装が集められ、今やがらんとした舞台中央に放り投げられ、山積みになっていた。出演者と座員たちが二日目の舞台のため、春日神社に向かって観客とともに出発し、行列している頃の女性たちはおいて行かれ、数十もの衣装を洗濯したり、畳んだりする膨大な仕事に着手するのである。多くの衣装はとても繊細で、極めて高価なものである。

また外部の研究者たちも、写真のコレクション、舞の図解、楽曲の録音、祭礼のフローチャート、衣装と面のカタログ、村の記録を編纂したものなどによって、王祇祭が「真正なものであること」を証明するのに決定的な役割を果たしてきた。ただしそれは、当初は混乱し、十分に練られたものではなかった舞台上での技能を研究者がまとめ上げたという意味ではない。儀礼の手順を記したノートや演じ方の手引などは、数世紀にわたり伝承され、私的に用いられてきた。むしろ、外部の研究者によって作成されたコーパス（データの集積・体系）は、祭を広く知らしめ、祭礼の形式を規格化し、美の基準を示すことに役立ってきた。それに基づいて技能が教示され、舞台が評価されているのである。王祇祭、その中で演じられる能、および黒川能一般について言及したものは二〇世紀の間、何世代にもわたり、黒川の人々にも外部の学者

らにも等しく還元され、彼らが二次的な解釈を行う上で、影響を与え続けてきたということができよう。

この視聴覚資料や文書記録は、黒川の人々によっても用いられてきたが、それは祭や能を宣傳するためであると同時に、絶え間ない調査を遮るためでもあったと言わねばなるまい。調査を行う文化人類学者が多く、点について有益な書籍や論文を引用するのは一般的なことである。また、独創的な成果のいくつかは地元の人々と研究者、ジャーナリストの間での対話によって生み出された。

しかしながら、地元の人に気に入られた専門家と、専門家に関心を持たれた地元の人々が、真正な形式や基準を決定するにあたって共謀関係にあると理解するのは単純すぎる。おそらく、黒川能の後援者として最も影響力を持ったのは、詩人で人民主義者の作家、真壁仁であった。彼は一九四〇年代から一九七九年に亡くなるまで、何度も黒川を訪れている。一九四〇年代後半には、地元住民たちにもう一度祭礼に参加するように働きかけ、彼の最初の本や記事などを読んで、一九五〇年代にジャーナリストや観光客が徐々に増え始めた。一九六〇年代半ばに、全国誌の取材チームに協力するよう黒川の人々を説得し、東京への公演旅行やNHKとの交渉を勧めたのも彼である。しかし、同時に彼は国の農業政策を執拗に批判しており、一九六〇年代に広く読まれた彼の黒川に関する解説には、「伝統的な」生活様式が「近代化しきってしまふ」ことを目指した、地域の発展計画に対する激しい批判も含まれていた。黒川の人々も、自

分たちの集落にそのような近代化計画が導入されるよう、活発に働きかけていたのだ。

実際、多くの専門家はかなり両義的な存在として扱われている。祭礼のイメージの中心にあるのは、神社の祭礼としての能であり、プロフェッショナルな芸術ではないのだが、ものごとを突き詰めたがる専門家たちは、常にいくばくかの居心地の悪さを生じさせる。「我々はプロではない」という発言は、黒川の人々が「免責」を申し立てる際によく聞かれる。かなりの数の住民が、舞台の細部に至るまですべてを間近で見ようと祭りにやってくる人々よりも、酒を飲んで社交にいそしむために来る人々を好んでいるのは確かである。これは、祭礼能の真正性に関わる、普遍的な矛盾を反映するものである。祭礼能は、一方では、複雑に構成された芸の形式を秩序立てて稽古し、慎重に準備することによって成り立っているが、他方では、自我を意識し分析することによって簡単に崩壊するような、情動的で無批判な祝祭の雰囲気求められる。黒川能は何である「べき」で、どのようなにある「べき」かという議論は、住民を二分し、人々を外側へと向かわせる。そして、彼らのことをのぞき見ている外部世界に相対する中で、住民たちは結束するのである。

稲作用のトラクターが世代交代という意図しない結果をもたらしたこと。茶の間にテレビがもたらされたことで家父長の権威が失墜したこと。黒川の文化遺産をめぐる文化のポリテクスに見られる部内者と部外者、伝統と近代の間の複雑な相互作用。その真価を明らかにできたのは、私が庄内の生活世界について長期間の参与観察を行ってきたこと、そして日本社会につ

いて定点観測を行う機会を与えて下さった地元の皆さんの忍耐と寛容によるものである。しかし、ここで私が示した議論は、マクロな傾向がミクロの実践に反映されているという話でもなければ、人類学者や民俗学者はローカルな場所からより広い社会について何かを言うことができるという話でもない。むしろ、人口動態や政治、経済といった大規模な力が日常生活に働きかける際、その力は常に実行に移され、解釈される必要がある。またその力は常に展開や方向転換を余儀なくされるということである。時と場所を共にすることや、注意深い観察や傾聴によつてのみ、我々は、その力の本当の意味を明らかにすることができる。これこそ人類学が、現代日本を理解するために示してきたことであり、これがまさに私が二一世紀初頭の日本に関するいくつかの不吉な予言を疑わしいと思う根拠なのである。

### 確実性から不確実性へと向かう二一世紀はじめの日本

今日の日本は、もちろん二〇世紀後半の社会とは相当に異なっており、日本で、終戦から五〇年間にわたり育まれてきた自信は、昨今の経済・政治・社会の方向性に対する強い不安感にその地位を譲り渡した。日本社会にとつても、日本研究にとつても、一九九〇年代半ばが転機となった。人類学者などが五〇年間追いかけてきた、中流社会としての日本の凝集性や、家族・仕事・学校の緊密な連携は崩壊した。日本が一九五〇年代から九〇年代にかけて、不確実

性から確実性に向けて劇的に変化したとすれば、その後の二〇年間には、確実性から不確実性へと逆行してきたのである。

本章の冒頭では、二一世紀の日本について停滞や凋落という予言を導き出しているいくつかの主要な統計や社会の風潮に言及した。東京のような大都市でも、庄内のような地方都市でも、これは等しく真実である。庄内の人々は、学校が統合され、工場が閉鎖し、二市の市街地の大通りにシャッターの閉まった店が並び、地方自治体が合併して公務員の削減が進むのを目の当たりにし、悲しい思いをしている。村では、農家の数が激減し、高齢化が進んでいる。庄内の農業従事者の平均年齢は約六六歳である。村の寺院は多くの檀家を失い、崩れた空き家があったところで景観を損なっている。若者の数が減ったため、婚活の努力はむなしく、ほとんど実を結ばない。

しかしながら、庄内のような地方についても日本全体についても、悲惨な予言を直ちに受け入れるべきかどうか私には分からない。大勢の人類学者が今でも日本を訪問し、自分たちだけで、あるいは日本人の同僚たちと共にフィールド調査を行っている。二一世紀の若い研究者たちの研究テーマや調査地の多くは、数十年早く調査を始めた我々を驚かせる。それは例えば、日系ブラジル人工場、ネットカフェ、精神科のカウンセリングセンター、テーマパーク、相撲部屋、アニメ工房などである (Kelly 2015)。しかし、日本を専門とする人類学者が以前と変わらず持っているのは、間近で観察し、判断を保留し、人々が意味を見出し、前に進み、レジリ

エンス（立ち直る力）を有する可能性を尊重する意思である。

たとえば、人口学が命運を決定するという悲観論を取れば、高齢化と人口減少が同時に進行しており、若い日本人の間では（高齢者も同様であるが）孤独や孤立が増加している。いわゆる「ソロ」世代である。これは不安の要因であるに違いないが、私は二〇世紀の伝統的な家族の減少が、社会を束ねていた社会的紐帯の終わりを意味するという確信を持ってない。

むしろ、昨今の人類学調査は、再生産に基礎づけられた伝統的家族を超えるものとして、親密性やアソシエーションの新しい形について報告している。これらの研究は、急速に増加している実験的なシェアハウス（ヤングアダルトが対象のものと同齢者が対象のものがある）、家族だけでなく、地域やネットワークを基盤とした世代を超えた高齢者ケアの新しい形態、終末期医療や追悼、葬送の新しい方法（樹木葬、永代供養墓、自然葬など）、あるいは「ポスト・ヒューマン・ファミリリー」と呼ばれるペットとの感情的紐帯などを含んでいる。日本人がともに、あるいは個々でどのように生きるかという問いについて、二一世紀がさらなるイノベーションや実験をもたらすというのは十分にあり得る話である。二〇世紀型家族の衰退は、持続可能で確実な社会的紐帯の終焉を意味するわけではない（Kawano, Roberts and Long 2014を参照）。

また、昨今の人類学者による日本研究では、二〇一一年三月一日からの数々の災害の余波の中で、災害後のランドスケープにもう一つの焦点が当てられてきた。東北地方太平洋岸側の荒廃、多くの人命の損失、共同体の移転、そして除染が進められている福島原子力発電所とそ

の周辺の土地と海に起因する不断の恐怖——このすべてが、自らの生活と共同体を再建する決意とその可能性に当然の疑念を生じさせている（ギル、シテীগ、スレイター編、二〇一三年の報告を参照）。

正しい教訓を学ばず、再建、特に中央政府によるトップダウンの資本投下が、単に過去の過ちを繰り返し、古い政策をやり直すだけであることに意気阻喪している人々もいる。しかしながら、人類学者らは建設的な提案を見出している。それは、たとえば市民の科学サークルなどで、そこで人々は福島における放射線量を独自に計測するために技術を開発し、訓練を行っている。新しい研究としては、「3・11」の津波の前に無力であることが証明された巨大な防潮堤を再建、さらには拡張しようとする政府の計画に対し、多くの地元が反対していることについての調査が行われている。津波の際、東北地方の太平洋岸には約四〇〇の防潮堤が二三〇キロメートルにわたって存在していた。地域特有の景観・美観が損なわれ、往來の慣習が破壊されても、住民はおおむねそれを許容していたが、これらの共同体を対象とした人類学者の研究は、目下、県や中央政府が防潮堤の修理と拡張を一方的に計画していることへの反対の声を収集している。しかし、その焦点は政治ではなく、社会に置かれている。政治的な反対運動には、我々はあまり関心を引かれず、地域の知恵に立脚し、地域の要請にさらに答えるために、建設的な提案を見出だそうとする現在進行中のローカルな活動に関心を持っている（大いに見込みがありそうな選択肢として、海の暴威を和らげるため、コンクリートの防潮堤ではなく、

沿岸の防潮林を用いた「森の長城プロジェクト」がある。

東北沿岸を上へ下へと、仮設住宅や他の地方に散らばっていった数十万人の住民に、何がおきるのだろうか。そして、その人々がかつて暮らしていた、再建されるかどうかわからない数十の地方自治体に何がおきるのだろうか。人類学者のトム・ギルは五年かけて、福島原発周辺の計画的避難区域に設定されていた飯舘村から離散した住民を訪問し、調査を行ってきた。研究者や政策立案者、一般の日本人など多くの人々が、「ふるさと」の力に引きつけられ、住民は二〇一一年以前の生活に戻りたいと願うものと決めつけている。ギルの長期にわたる人類学的調査において示されたのは、「ふるさと志向」という単純な予言が誤っていることはとつくに証明されていること、そして、突然の大災害の直後、帰還するか移転するか、生活や仕事、生活上の慣行、ネットワークをどのように再構成するかに関する極めて複雑で偶発的な意思決定を、人々がどのように行ったかということである。彼らは自らの未来を予測するのだが、ここでは社会的、経済的、政治的、心理学的なさまざまな要素が鋭くぶつかり合っている。ギルの記述を読めば、災害から五年経った今、このように日常生活を間近で注視し続けることによつてのみ、それがどのようなものであったかを理解し、真価に気付くことができるということに気付かされる。



## むすび

ローカルなレベルで長期間、注意深く聞き取りを行うことで学べることが数多くあるということをも、さらに広い範囲で裏付けるために引用できる例はその他にもたくさんある。それにしても、それはなぜそれほど重要なのだろうか？ なぜなら、それは我々がなすがまま人生を経験する場所であるだけでなく、我々の生活の構造が形作られ、その形が作り直される場所だからである。

この点をたとえ話をを用いて表現したい。外国語を学習するために悪戦苦闘したすべての読者にとつては、おなじみのことかと思う。英語では、新しい外国語を勉強するプロセスを、言語「獲得」と言うが、では、誰が何を獲得するのだろうかという問いが湧き上がってくる。もちろん、我々が日本語や英語や韓国語を学ぼうと苦労しているということは、我々は別の言語を獲得しようとしているということだが、同時に、言語が我々を獲得している（一）という事実を我々は見逃しがちである。言語が言語として生き残るためには我々「話者」が必要であるし、そして、「話者」になる過程で我々は、自分の考え方、感じ方が、その言語の持つさまざまな形式によって作り替えられていることに気付くのである。言語は我々の頭と心に入り込んで、我々の話し方だけでなく、考え方、感じ方も形作っていく。言語と話者の間で相互に規定しあ

うプロセスは、言語と人間双方に変化を生み出すが、その変化を予期することもコントロールすることも難しい。数世紀かけて、ブリテイッシュ・イングリッシュはアメリカン・イングリッシュになり、そしてイギリス連邦英語となったが、現在はさまざま話者による地球規模の共同体が「さまざまな英語」を創り出している。それは、古い言語に、新しいリズムや新しい構造を与えるものである。さらに蛇足めいたことを言えば、グローバルな英語の出現の過程は、今となつては過去を振り返つて説明することができるが、決して前もつて予見することはできなかったのである。

それはつまり、我々がその中で生きている大きな構造と、それらの構造の中で我々が適応している実際の生活の間で、あるいは、我々にとつて意味を持つ生活と、構造によつてもたらされるものの中で、社会生活の根本に関わるやりとりが行われているということである。二〇世紀の日本は、モダニティという西洋固有の概念に挑む先駆者であつた。二〇世紀の日本に関する社会科学は、これまで決して予期することのできなかつた、社会科学の調査自体を根底から変えるような手法でモダニティに関する理解を多様化した。日本社会は、敏感さと持続可能性という新しい生き方を我々に示すことで、二一世紀においても十分に先駆者であり得るだろう。

## 参考文献・引用文献

- Allison, Anne. *Precarious Japan*. Durham and London: Duke University Press, 2013.
- Bestor, Victoria Lyon and Bestor, Theodore C. (eds.), *Routledge Handbook of Japanese Culture and Society*. New York and London: Routledge, 2011.
- 藤竹暁「家庭の文化変容」中村祥一、中野収編『大衆の文化：日常生活の真情を探る』有斐閣、一九八五年、一四一―一六一頁
- トム・キル、ブリギッテ・シテীগ、デビッド・スレイター編『東日本大震災の人類学：津波、原発事故と被災者たちの「その後』』人文書院、二〇一三年
- Kawano Satsuki, Roberts, Glenda S. and Long, Susan O. (eds.), *Capturing Contemporary Japan: Differentiation and Uncertainty*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2014.
- Kelly, William W. "Japanese No-Noh: The Crosstalk of Public Culture in a Rural Festivity." *Public Culture* 2(2), 1990, 65-81.
- Kelly, William W. "Digital Technologies, Virtual Communities, Electronic Fieldwork: The Slow Social Science Adapts to High-Tech Japan." In: Roger Sanjek and Susan W. Tratner (eds.), *Fieldnotes: The Makings of Anthropology in the Digital World*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2015.
- Kelly, William W. and White, Merry I. "Students, Slackers, Singles, Seniors, and Strangers: Transforming a Family-Nation." In: Peter J. Katzenstein and Takashi Shirraishi (eds.), *Beyond Japan: The Dynamics of East Asian Regionalism*. Ithaca and London: Cornell University Press, 2006, 63-82.
- Pilling, David. *Bending Adversity: Japan and the Art of Survival*. London: Allen Lane, 2014.

Robertson, Jennifer Ellen. (ed.) *A Companion to the Anthropology of Japan*. Malden: Blackwell Press, 2005.

### 【責任編集】

**井上順孝** (いのうえのぶたか)

1948年生。國學院大學神道文化学部教授・同研究開発推進機構長。博士（宗教学）。宗教社会学が専門。東京大学文学部卒。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京大学文学部助手、国学院大学日本文化研究所教授をへて現職。（公財）国際宗教研究所・宗教情報リサーチセンター長。

主著に『世界の宗教は人間に何を禁じてきたか』（河出書房新社）、『本当にわかる宗教学』（日本実業出版社）、『神道入門』（平凡社新書）、『〈オウム真理教〉を検証する』（編著、春秋社）、『宗教社会学を学ぶ人のために』（編著、世界思想社）、『ビジネスマンのための「世界の宗教」超入門』（編著、東洋経済新報社）など。

### 【著者】

**篠田謙一** (しのだけんいち)

1955年生。国立科学博物館副館長兼人類研究部長。博士（医学）。分子人類学が専門。京都大学理学部卒。佐賀医科大学助教授をへて現職。

主著に『日本人になった祖先たち』（NHK出版）、『DNAで語る日本人起源論』（岩波書店）など。

**スチュアート・E・ガスリー** (Stewart E. Guthrie)

1941年生。フォーダム大学名誉教授。認知宗教学が専門。1976年にイエール大学からPh.D.

主著に *Faces in the Clouds: A New Theory of Religion*, Oxford University Press, 1995, *A Japanese New Religion: Risshō Kōsei-kai in a Mountain Hamlet*, Ann Arbor, 1988など。

**河野哲也** (こうのてつや)

1963年生。立教大学文学部教授。博士（哲学）。哲学・倫理学が専門。慶應義塾大学文学部卒。同大学院文学研究科博士課程修了。

主著に『善悪は実在するか』（講談社メチエ）、『道徳を問いなおす』（ちくま新書）など。

**ウィリアム・W・ケリー** (William W. Kelly)

1946年生。イエール大学教授。社会人類学が専門。1980年にブランダイス大学から Ph.D. 山形県の庄内地方でフィールドワークを重ねた。近年は日本のプロ野球、とくに阪神タイガースの研究。日米の学術交流促進等より2009年に旭日中綬章を叙勲。

編著に *Fanning the Flames: Fandoms and Consumer Culture in Contemporary Japan*, SUNY Press, 2004, *This Sporting Life: Sports and Body Culture in Modern Japan*, Yale Council on East Asian Studies Occasional Monograph Series, 2007 など。

【訳者】

**藤井修平** (ふじいしゅうへい)

1986年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在籍。訳書にミルチャ・エリアーデ『アルカイック宗教論集』(共訳、国書刊行会)、『スクリプナー思想史大事典』(共訳、丸善出版)。

**加藤久子** (かとうひさこ)

1975年生。一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。國學院大學研究開発推進機構客員研究員。著書に『教皇ヨハネ・パウロ二世のことば——一九七九年、初めての祖国巡礼』(東洋書店) など。